
sweet Island ~ 妹達とお兄さん ~

sorapon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sweet Island ～妹達とお兄さん～

【Nコード】

N7382Y

【作者名】

sorapon

【あらすじ】

主人公「高ノ宮 甲太^{たかのみやこうた}」は3年前、仕事の関係で故郷の島を離れる父親と共に本州へと渡った。しかし3年間の間にいい思い出は無く、仕事を済ませた父親に言われた故郷へ帰るかという問いにすぐに肯定の返事をした。本州から船で40分、そこそこ広いが自然の多い目立った産業のない田舎の島、赤垣島。故郷の家には三人の家族が居る。二人のクールな妹達と、甘えたがりな美人の母親。父親と共に船の上から甲太は、甘い明日に胸を躍らせていく。

こんにちは赤垣島！

船の警笛が聞こえる。

島に着くまで後15分程か。

背中荷物が重いけど、今の気持ちに比べれば全く問題ない。

風が気持ちいい、鳴き声を上げながら飛ぶ鳥達を見ると心が踊る。

3年ぶりの故郷だ。

そう思うと、昔別れた顔がいくつも浮かんでは消えていく。

「早く会いたいなあ」

本土のほうでは、内気で友達も少なかった。

けどきつとこっちは違う、普通にやれるはずだ。

「甲太、もうすぐ着くから準備しておけ」

「わかってるよオヤジ、準備は出来てる。」

背に背負った大きなリュックの重みを感じる。

逆に言うなら、本土での思い出はこれだけだ。

島での思い出に比べたら、軽いことこのうえないな。

* * *

俺たち親子を含めて十数人という少ない乗客を載せた船が港に着いてから数分。

「おいオヤジ、母さんと由美はどこだ」

「俺に聞くなムスコよ」

真夏の日差しの下、直立不動の二人の男。

俺が他人なら絶対に視線を合わせたくない何かがある。

待ち合わせ場所がこんな日陰もないような、時計の下なんて所じゃなければ……

俺たちの目が濁り始めた頃に、細かい傷があちこちに入った軽自動車走ってくる。

そのさまは暴走しているようで、俺は向こうでよくやっていたゲームのことを

「つてあぶねえっ!?!」

「あぁっつっつっ」

オヤジがエコー付きの悲鳴(?)を上げてはねられる。

ああ、合掌。

「遅れてごめんねっ!?!港にくるのなんて久しぶりだから迷っちゃって!」

扉が勢い良く開いて、背の高いスレンダーな美人が出てくる。

というか、母親だ。

マザコンではないが、息子eyeから見ても美人な母親だ。

「いいよ母さん、そんなに待ってもいないし。久しぶり」

「あーコー君っ！久しぶりー」

さすがに抱きつきはしないが、手を握ってブンブンと振る。
痛い。

「まていムウスウコウよ！父より先に母と触れ合うとは何事だ！」

怪人海坊主が現れる。

どうやら落下地点が海だったらしい、惜しい。

「あなたっ！」

「ミスウィートハニーツ！」

F1かくやという速度ですつ飛ぶ。

ラブオーラをまき散らしながら、若干40半ばの夫婦が抱き合う
姿は一種恐怖を感じる。

特に親ともなれば。

「あれ、そういえばユウとマコは？」

「あれ？ユーちゃん達先に行ったはずなんだけどなー？」

我が妹達の姿が見当たらない。

「ふっふっふ、久しぶりの愛しの父との再開が恥ずかしくて逃げ
てしまったかな！」

「逃げたいよ、そのラブオーラ夫婦と変態から」

声が聞こえる、どこだ。

視線を巡らせると、港の端、売店前の日陰にあるベンチで優雅にくつろぐ二人の少女を見つける。

「おかえりなさい、兄さん」

「おかえり変態共」

艶やかな黒髪のショートポニーと、腰に届きそうな長さのロングヘアを揺らして二人がこちらに歩いてくる。

二人とも俺の妹、名を由美ゆしみと繭子だ。

ちなみに、マユ 繭子、口が悪い方 は自分の名前が嫌いだ。虫を連想するから。

久々に会った二人は3年しか期間は空いていないというのに、見違えるほど美少女になっている。

胸は二人とも発育しきっていないが。

「ただいまマイドゥターズッ！」

父親が抱きつこうと飛びつくがよけられて海に帰る。そのまま海坊主になればいい。

それを視界に入れないようにしながら、久々にあった妹達に、最上の笑顔を向ける。

これからは一緒に暮らすんだ、昔からベタベタとしている兄弟ではなかったから、これからはできるだけ仲良くしたい。

ユウは少し不安そうに、マユは暑いのだろうか苛ついた表情だ。

これからよろしく そんな言葉を込めて、おかえりに返事をする。

「ユウ、マユ」

ただいま、これからよろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382y/>

sweet Island ~ 妹達とお兄さん ~

2011年11月22日02時56分発行